

# エリック・ル・サーージュ ピアノリサイタル

ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 Op.109……………ベートーヴェン

幻想曲 ハ長調 Op.17……………シューマン

ピアノ・ソナタ 第21番 変ロ長調 D960……………シューベルト

夏

## 2014 四季コンサート

2014年6月20日(金)18:15開場 18:45開演

会場:浜松市教育文化会館

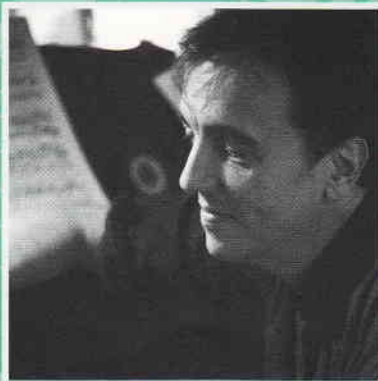
主催:浜松音楽友の会

### プロフィール

1964年南仏エクサン・プロヴァンス生まれ。パリ国立音楽院に学び、81年ピアノでブルミエ・プリ(一等賞)を受賞。翌年には室内楽でもブルミエ・プリを獲得し17歳で卒業。また、この時期ロンドンでマリア・クーシオに師事し、芸術性において決定的な影響を受けた。85年ボルト国際(葡)第1位、87年ポツォーリ国際(伊)第3位、89年ロベルト・シューマン国際(独)第1位、同年のリーズ国際(英)第3位など多数のコンクール受賞歴を持つ。オーケストラ・ソリストとしての出演も多く、ロサンジェルス・フィル、ロイヤル・スコティッシュ管、ロッテルダム・フィル、ドレスデン・フィル、トゥールーズ・キャピトル国立管、フランス国立管をはじめとする数々のオーケストラと共演。優れた室内楽奏者としても知られ、国際的に主要な音楽祭への出演のほか、毎年夏に行われるサロン・ド・プロヴァンス室内音楽祭をP.メイエ(クラリネット)、E.パユ(フルート)等と共に主宰している。

CD録音も多く、99年度音楽之友社レコード・アカデミー賞大賞を受賞したプーランクの室内楽全集、ミヨーの室内楽作品集、P.メイエ(クラリネット)との共演によるブラームスのソナタ集(ピアノ・ソナタ第3番を含む)、フランク・ブラレイとの共演による「2台のピアノのための協奏曲」を含むプーランクの協奏曲集(ステファン・ドゥヌーヴ指揮リエージュ国立フィルハーモニー管弦楽団)およびモーツァルトのデュオ作品集をリリースしているほか、シューマンのピアノ作品および室内楽作品の全曲録音を完成させ、極めて高い評価を獲得している。また、フォーレ作品全集の録音、リリースも進行中。

エリック・ル・サーージュ  
ピアノリサイタル



ERIC LE SAGE  
PIANO RECITAL

●ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) / ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 Op.109

ベートーヴェンが遺した32曲のピアノ・ソナタは、バッハ「平均律クラヴィーア曲集」とともに、ピアノ音楽史上に燦然と輝く金字塔である。この32曲は20歳前半に作曲された第1番に始まり、最晩年を除く全生涯に渡って連綿と書き続けられ、いわばベートーヴェンの創作様式の縮図とも言っても過言ではない。加えてベートーヴェンは古典様式から出発しながら、1作ごとにピアノ音楽における新しい試みを作品に施しており、結果的にそれぞれの曲が独自の様式を携えた極めて個性的な存在となっている。それはそのまま音楽史上のピアノ音楽の発展に結び付いているともいえるだろう。

このソナタが完成したのは、《ミサ・ソレムニス》に取り掛かっていた1820年の秋。ちょうど「ディアベッリ変奏曲」や「交響曲第9番」にも着手しているように、ベートーヴェンの創造力が極めて充実していた時期である。晩年のベートーヴェンが、古典的ソナタ形式に持ち込んだ2つの大きな様式は、フーガと変奏曲。前作《ハンマクラヴィーア》に雄渾なフーガを採り入れて前人未到の境地に到達したベートーヴェンは、「第30番」第3楽章に、見事な変奏技法をもって臨み、自らに問いかけるように内省的な抒情とロマン的な情感を横溢させている。最近の研究で、「不滅の恋人」と断定されたアントーニエ・ブレンターノの娘マクシミリアーネに献呈された。

優美な第1楽章ホ長調はやや短く、間を置かず疾走するかのホ短調第2楽章に移り、抒情的な第3楽章ホ長調は主題と6つの変奏で構成されている。

●ロベルト・シューマン (1810~1856) / 幻想曲 ハ長調 Op.17

1836年、ドイツのボンでは故郷の大芸術家ベートーヴェンの没後10年に際して記念碑を建設する計画が持ち上がっていた。生前より深く尊敬していたベートーヴェンに関わる資金集めを依頼されたシューマンは、主宰する音楽誌「新音楽時報」において、それに協力する旨の論陣を張った。さらに金銭的な一助をと、ベートーヴェン風のソナタを書くに思い至り、それぞれ楽章のタイトルを「廃墟」、「トロフェン」、「棕櫚(シュロ)」とした「フロレスタンとオイゼピウスのための大ソナタ」を作曲した。

このソナタは出版社側があまり乗り気にならなかったが、様々な改訂を加えた後に「幻想曲」として1838年に出版された。この作品においてシューマンは、古典的な様式感に捉われない自由な即興性をふんだんに散りばめたロマンと、進取性に溢れた高邁な境地を確立したのである。副題はすべて削除された代わりに、冒頭には詩人シュレーゲルの詩「夕映え」の一節がエピグラフとして掲げられ、リストに献呈された。

第1楽章は「徹底して幻想的、かつ情熱的に」。楽章の最後にはベートーヴェンの歌曲集「遥かな恋人に」第6曲の旋律「受けたまえ、この歌を」が引用され、ベートーヴェンと、後にシューマンの妻となるクララの2人に捧げるという性格が明らかである。第2楽章は「中庸のテンポでエネルギーに」、そして第3楽章は「緩やかに、徹底してひそやかに」。

●フランツ・シューベルト (1797~1828) / ピアノ・ソナタ 第21番 変ロ長調 D960

シューベルトが世を去る2ヵ月ほど前、最後のピアノ・ソナタ3曲、即ち「第19番 ハ短調 D958」、「第20番 イ長調 D959」、そして本作が書き上げられた。この3曲は、シューベルトの没後1837年にまとめて出版され、出版社ディアベッリの意向によってシューマンに献呈されている。

かねてよりベートーヴェンに強い崇敬を抱いていたシューベルトは、1827年3月18日に手術後のベートーヴェンを見舞い、同月26日にベートーヴェンが亡くなると、墓地までたいまつを掲げる36人のひとりに加わって大作曲家を見送った。その半年後に完成した3曲のソナタのうち、「第19番」と「第20番」は、構成や響きからベートーヴェンへのオマージュとも位置付けられているが、ピアノ・ソナタ最後の作品となった「第21番」ではそれに訣別し、完璧な自己の様式を確立している。即ち抒情的な旋律美とロマン的情感の表出が比類ないスケールで描かれ、独特の揺蕩うようにみずみずしい内省が綴られているのである。

第1楽章は変ロ長調。瞑想的で穏やかな主題が繰り返されるが、この積み重ねによってシューベルト独自の精緻で絶妙な世界観が構築されている。第2楽章は嬰ハ短調で三部形式を取っており、神秘的な香りのする美しい楽章である。第3楽章は変ロ長調で、前作までのベートーヴェン的な気分から逸脱し、独自の品格に彩られた世界を表出しているが、繊細さが際立つ楽章である。そして第4楽章 変ロ長調は長大なフィナーレであるが、冒頭のG音が幾度となく主題を遮り、著しく印象的な風趣を醸し出す。クライマックスは一気に加速して全曲を閉じる。